
サラ・ベルナールごっこ

新尾林月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サラ・ベルナール

【Zコード】

Z5325A

【作者名】

新尾林月

【あらすじ】

少年時代の親友との夏の日の思い出。同性愛表現があります。

たしか、中学2年の夏休み。

おれは学年でもかなり成績のいいほうで、一学期の最後の週にっこなわれた三者面談でも、有名進学校への受験を勧められていた。しかし、親や担任の期待が大きくなればなるほど、おれ自身の気持ちは萎えていった。自分がいわゆる頭でつかちな優等生で、勉強以外にとくべつ好きなこともなければ、自慢できるような特技があるわけでもない凡人に過ぎないとこいつことに気づきつつあつたせいだろう。

このまま進学校に入つて大学に入つて会社に入つて墓に入つて、それでいつたいなんになる。そんなことをいうと、笹川は決まって厭味たらしく唇の端をひん曲げた。

笹川はおれよりもはるかに成績が悪かつた。進級を心配するほどでもなく、不良というわけでもないが、なんとなく、ほかの生徒たちと少しちがう位置にいるような、というよりも、周囲の人間を斜めうえから眺めているような奴。つねに小難しい本を広げていて、教科書を机に出しもしないのに、教師の質問に平然と答えてみせたりする。教師からも生徒からも、あまりよくは思われていなかつた記憶がある。気味悪がられているのか、いじめられることもなかつた。

共通点といえば、友達が少ないことぐらいしかなかつたが、おれたちは不思議と氣があつた。

笹川は外面だけは異常によかつたので、口うるさいおれの親も、笹川の家に勉強に行くといえば、文句はいわなかつた。笹川は理数系はからきしだつたが、文系の科目だけは抜きん出でていたので、それらを苦手とするおれの宿題を手伝ってくれることもあつたし、実際に、彼と付きあつよになつてから、文系の試験の点数が上がつた。

学校の図書室なんてめじやないほどの蔵書も、 笹川家の魅力だった。二一 チエ、 カフカ、 カミコ。 ランボーに出会ったのも 笹川の部屋ではなかつたか。

なんの話だつたかな。 そうだ、 中学2年の夏休みだ。

蝉の鳴き声が姦しい暑い日だつた。 いつものように 笹川の部屋で本棚を漁つていると、 笹川がいきなりこういい出した。

「サラ・ベルナールごつこしない？」

サラ・ベルナールは19世紀の大女優だ。 笹川は映画にも詳しかつたので、 影響を受けたおれもそのぐらいのことは知つていた。 なんの映画かと聞くと、 笹川はいつもの皮肉めいた笑みを浮かべて、 ベッドに寝そべつた。 そしてサラ・ベルナールの奇妙な嗜好について蘊蓄を垂れはじめた。

サラ・ベルナールの密かな趣味は、 死体のふりをして遊ぶことだつたという。 彼女は屋敷に棺を運び込み、 自らそこに横たわつて、 死人を氣取つた。 彼女の命令で、 使用人たちがその棺に取りすがつて盛大に泣き喚き、 それによつて彼女は非常な満足感を得たのだそうだ。

今でこそ、 ネクロフィリアという性嗜好のひとつであると納得できるが、 そのときは、 なぜそんなことをするのか、 理解不能だつた。 同時に、 興味が湧いた。 笹川の巧妙な語り口も、 おれの好奇心を刺激した。

エアコンが効いて肌寒いぐらいの部屋で、 笹川はベッドに仰向けになつた。 腹のうえで指を組んで目を瞑つた。 滅多に外に出ないせいで白い肌が、 まるで本物の死体のように見えた。

おれは予め指定されたとおりにまず吃驚した演技をし、 ベッドに駆け寄つて 笹川の腕に触れた。 笹川の名前を呼びながら、 何度も体を揺すつた。 もちろん、 笹川は返事をせず、 びくとも動かない。 そのうちおれは不安になつてきた。 ひょっとすると、 本当に 笹川は死んでしまつたのではないだろうか。 みなみならぬ不安が押し寄せ、 悪寒が脊椎を駆け抜けた。

笹川、もういい。もうやめよう。必死になつて訴えると、笹川はぱちりと田を開けた。吸血鬼のように音もなく起き上がると、涙目のおれを見て噴き出した。

ひとしきり笑つてから、 笹川は交代しようといい出した。 正直、
おれはこの遊びになにか禁忌を犯しているようなうしろめたさを感じ
じて腰が引けていたのだが、 同じような気持ちを興奮ととらえてい
るらしい 笹川の無邪気な顔を見ていると、 憽していると思われるの
が悔しくなり、 平氣な顔をつくつてベッドに横たわった。

おれがしたのと同じ手順で、篠川が死体役のおれの前に跪き、泣き真似をはじめた。なるほど、こちら側に据わってみると、たしかに愉快だった。

いつ覚醒しようかと頃合いを見計らつてゐるが、突然笠川の喚き声がやんだ。不審に思つて薄田を開けようとしたとき、唇になにかやわらかいものが触れた。

おれは跳ね起き、渾身の力で笹川を押し退けた。前述のとおり、おれは奥手な優等生だつた。当然ながら、キスなんてしたことがなかつた。

羞恥と憤怒が混在したわけのわからない気持ちが湧き上がってきた。おれは思いつく限りの罵詈雑言を口にした。真顔の笹川を突き飛ばして、転げるようにならへんの家を出た。

帰宅してから参考書を忘れたことに気づいたが、取りに戻る気になれなかつた。なくしたというと、親は怒り狂つた。説教を受けながら、おれは泣きたくなつた。なにもかも笹川のせいだと思つた。

笹川の家には一度と行かなかつた。学校で顔をあわせても、無視した。笹川のほうから話しかけてくることもなく、他人よりも遠い存在のまま中学を卒業して、おれは進学し、笹川は就職した。

それから今までの ore の人生は、両親や教師や ore 自身が想像したものと寸分たがわぬものになった。高校に入り、大学に入り、そこそこ安定した食品会社に就職した。結婚はまだだが、おそらくそういうことになるだろうという相手もいる。

忙しい毎日のなかでの夏の日の記憶が薄れかかっていたある日、
笹川から手紙が届いた。厳密には、彼の母親から。

失血死のことだった。風呂場で手首を切ったのだ。あっけなく、
ありがちだ。 笹川らしいと思った。彼は常套手段といつもの忌み
嫌う反面、憧れてもいた。そのことに気づいたのもやはり、遅すぎ
たが。

喪服姿のおれを、 笹川の母親は腫れた目で迎え入れた。 笹川の部
屋は中学の頃とまったく変わっていなかつた。本棚の位置からベッ
ドの位置まで、まるで同じだ。一瞬、あの頃にタイムスリップした
ような妄想に陥つたほどだ。彼がここに入れたのは、あとにも先に
もおれひとりだけだつたのだそうだ。おれは優越感と同時に、同情
をもおぼえた。このうすら寒い部屋で、二十年近い間、 笹川はどん
なことを思つて時間を喰らつたのだろう。

狭いリビング・ルームの畳のうえに布団が敷かれ、 笹川が横た
わっていた。あのときと同じ白い顔に、おれは語りかけた。

笹川、もういい。もうやめよう。サラ・ベルナルルには終わ
りだ。

蝉がやかましい、夏の日の午後。

おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5325a/>

サラ・ベルナールごっこ

2010年10月8日15時09分発行